

名誉会員の推挙に寄せて



小林 良二 新名誉会員

【本学会役員歴】

第22期 理事（3年）、第23期 監事（2年）

第24期 監事（2年）、第26期 監事（2年）

役員通算4期（9年）



感謝のことば

この度は、日本社会福祉学会名誉会員にご推挙いただきましたこと、心から御礼申し上げます。社会福祉学の研究においても、また、日本社会福祉学会の活動に対しても、めばしい貢献をしていないのに、このような称号をいただき、大変恐縮しております。

私は大学院卒業後、1973年に特殊法人社会保障研究所（現国立社会保障人口問題研究所）に就職しました。当時研究部長だった故三浦文夫先生のもとで社会福祉政策研究の手ほどきを受けましたが、それまで社会保障・社会福祉の勉強をしたことがなかったので、悪戦苦闘したことをよく覚えています。

当時は、間近に迫りつつあった高齢社会への対応がにぎやかに論議されていましたが、政策的・実践的課題について、高名な学者や研究者の先生方、厚生省（当時）や自治体などの政策担当者、福祉施設や地域の福祉サービスのリーダーの方々などから、多面的なアプローチを学ばせていただいたことは本当に幸運であったと思います。特に社会保障研究所では、学術的な研究とともに、その研究が政策面であれ実践面であれ、国民や社会にとってどのような意義があるか考えながら研究することが大切であるということを教えていただき、頭でっかちな大学院生を抜け出すのにとても役立ったと思います。

1980年に、東京都立大学（前・首都大学東京）に移ってからは、介護サービスの拡大期を迎えた高齢者福祉の現場に興味を持つようになり、地方自治体の高齢福祉課、特別養護老人ホーム、ホームヘルプ・訪問看護サービス、ケアマネジメントなどをフィールドとして研究をさせていただきました。訪問看護師やホームヘルパーの方々と一緒に要介護独居高齢者や認知症高齢者宅を訪問させていただいたり、特別養護老人ホームに泊まり込んで実際の介護経験をさせていただいたことも忘れられない思い出です。

このような経験の中で、いまでも忘れられないのは、ある老人ホームを訪問した時のことです。施設のリーダーの方にお会いして調査のお願いをしたところ、その方から、「小林さん、あなたはそうやって簡単にデータの作成を依頼してくるが、大体研究者は、その結果をわれわれに何も返してくれない。

データを使って論文を書いて偉くなっていくことしか考えていないんだよ」と、きつく言われたことを覚えています。これは、私が駆け出しの研究者であった時代のことで、調査手続きの整備された現在ではこのようなことはないと思いますが、鮮明な記憶として残り、その後の私の研究生生活にとって重要な指針となりました。

今世紀に入ると、「社会的援護を必要とする人々」への対応が大きなテーマになり、いきづらさがかかえ、制度の隙間にいる人々への支援が社会福祉の重要な課題になりました。ここでは、制度・政策論だけでなく個別的な実践論が重視されるようになり、いわゆる「個別支援」についての研究方法が模索されるようになったといえます。2006年に東洋大学に奉職してからは、大学が拠点を置く地域の社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターをお願いして、地域の住民福祉活動や居場所づくりなどに関わるようになり、また、孤立死・孤独死の急増を受けて設置された自治体の「見守り相談室」の立上げに関わったりしました。

これらを通して、政府の施策が地域で実施されるプロセスにふれるようになりましたが、新しい施策が自治体や住民生活に浸透するにはかなり長い時間がかかること、現場の担当者は長期的に関係者や住民に関わる必要があること、研究者も長期的な視点から実践に関わることが必要であることを教えられました。また、専門職間の協働や地域住民の積極的な関与が求められるにもかかわらず、なかなか順調には進まないことなどを経験し、現場での課題解決の難しさを知ることになりました。

このように、私の研究は、政策→組織→実践へと関心が移って来たといえますが、それぞれの段階での拙い歩みを、良き師・良き先輩、同世代の研究者各位、優秀な院生諸君に教えられながら、ここまで歩んできたと思います。

退職後の活動としては、福祉の現場職員の方々の活動の可視化をテーマとした取り組みをさせていただいています。現場の職員の方々がいろいろな課題を背負って、悩みながら活動しておられる状況を見える化して、その社会的意義を明らかにすることにお役に立てればと思っています。

今後も、福祉の政策と実践をつなぐ研究者の役割はなんであるかをテーマとして、残された人生を過ごしていきたいと思っています。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。